

2011.3.11の大災害の後、6月に私は被災後初めて飯館村にいきました。その時に誘ってくれた田尾陽一さんは、最近とうとう飯館村に移住してしまいました。その田尾さんが書いた本の題名が、「飯館村からの挑戦」です。すさまじい本でした。私も何回か行っていましたが、ここまですごい活動をしていたとは知りませんでした。

飯館村須佐に住まいがある菅野宗夫さんと田尾陽一さんとの出会いが事の始まりです。飯館村は、福島原発からの距離で言えば、30キロ圏内ではなく、外にありながら、なぜか、放射能が流されて行って村中が、住めない地域になっていたのです。だから、宗夫さんのご家族は、4世代がばらばらに避難していて、お孫さんたちとは一緒に住めない状況になっていました。宗夫さんご夫妻は、村外にある仮設住宅に住んで、昼間は、須佐の本宅に私たちを受け入れてくださっていました。

2017年には、除染がすんだということで、長泥という一部の区域を抜かして、帰還可能地域となりました。でも、70歳にならない方々のほとんどは、帰還していないのが現状です。

田尾さんは、1960年入学の東大理学部物理学出身で、ずうっと研究者の道を歩んでこられました。4歳の時広島で原爆を爆心地から9キロの地点で見えています。そのこととこの度の飯館村とのかかわりが関係があるとご本人が言っています。私自身も、かつて原子物理学の研究に進もうと思って東大の理科1類に入学した、そのこととの関係で、飯館村に足を向けたのです。

田尾さんが中心になって立ち上げたNPO「ふくしま再生の会」は、理系の研究者、技術者のほか、心あるボランティアなど、更に飯館村の住民たちも個人会員として参加。今では300名の個人会員と7つの団体会員で、構成されている。

菅野宗夫さんが示した3原則

- 1、人災である。
 - 2、原子力発電所は、事故を収束させる技術を持っているべき。
 - 3、村民が帰村して安心して農業を営める施策を打つべき
- に全面的に賛成した田尾さんは、一つ付け加えた。
- 4、この事故は、福島だけの問題ではなく、世界の問題である。
- お互いにこれが確認できると、すぐに動きが始まった。

菅野典雄村長のところに行った時には、私も同行した。実は、菅野典雄さんが、まだ村長ではなかった時、社会教育課長として、私を講師に呼んでくれたというご縁があった。宗夫さんとも、遠い親戚という関係もあった。村長は、村民との協働ということに賛意を表し、再生の会の活動が公認された。つくばにある高エネルギー加速器研究機構(KEK)は、田尾さんの元の職場でもあったが、この機構長をはじめ教授助教授などとも一緒に活動をする意思が確認された。早速始めたのが、飯館村の各地の放射能測定。75%が森林だということで、そこは、全く除染ができない。そのうち、佐須のある家から、つくばのKEKに放射能測定値が、送信できるようになる。

2011年夏から、様々な実験が始まった。稲と似ているソルガムという植物が、セシウムの吸収力が高いというので、植えてみた。飯館牛と言われる牛たちは避難させられているが、どうしたら帰村して、酪農が続けられるのか、様々に取り組んできたが、2020年現在見通しが立たないでいる。

田尾さんたちが、飯館村でやってきたことは、信じられないようなすごいことがたくさんです。とても書ききれません。でも、田尾さんが移住を決意し、若者たちもどんどん押しかけているというのは、どんな社会を作ろうとしているのか、それだけはお知らせしなくてはいけないと思います。

それは壮大な「実験」のようです。

まずは、田尾さんという方が、いかに幅の広い人かということをおかなくてはなりません。世界中に知り合いがあり、好き嫌いがなく、誰とでも同じようにフレンドリーな付き合いができるようです。「支援する人」「支援される人」と分けない、これがとても大きなスローガンになっていると思います。この本の中にこの言葉が繰り返し使われています。「協働」という言葉でそれを表現しています。そしてどうやら、ジェンダーバイアスがかかっているようなのです。そして、8000メートル級の山々に登っていた体力です。

「自然との共生」という時、人間が自然をコントロールできる、と考えたうえでの共生であれば、その結末は見えている。人間がコントロールできないものとしての「自然」との共生こそが、これからの最大の「実験」となる。経済成長という観点から物事を判断せず、脱成長ということで、真の「自然との共生」を目指す壮大な実験を試みようというのが、ふくしま再生の会が、飯館村で取り組もうとしていることだという。すでに、若者たちが、飯館村に移住し始めている。コロナで行き来が難しくなっているが、「行く」ことをしなくても、飯館村の実験にかかわることが可能なのではないか、今、私はそれを模索したいと考えている。

新潟で3年ごとに行われている「大地の芸術祭」の「仕掛け人」北川フラムさんともつながっている。飯館村の「実験」には、「芸術とのつながり」も含まれている。

「もともと日本の農村には、古い因習がたくさんあり、生活再生などの中核である女性たちが意思決定の外にある」と田尾さんは指摘している。そういう農村の仕組み改革を伴うのであるから、この壮大な「実験」は、大変なことなのである。

コメント) Masumi Minagawa

飯館村は、男女共同参画を推進していたんですね。「翼事業」で何人もの女性リーダーが生まれました。村役場の男性職員の育児休業取得も、先進的に、取り組んでいましたよね。

Chizuko Kuroiwa

皆川さん、どうもありがとうございました。多分、ここのそのころの村長菅野典雄さんは、赤松良子賞を取っていますね。そのぐらい女性への理解があった方でしたし、そのほかの面でも村民から信頼されていました。ところが、どうしたことか、被災後は、村民たちが、「村長は変わってしまった」と思い始めて、人気はどんどん下がってきてしまったようなのです。不思議なことで、私もよくわかりません。